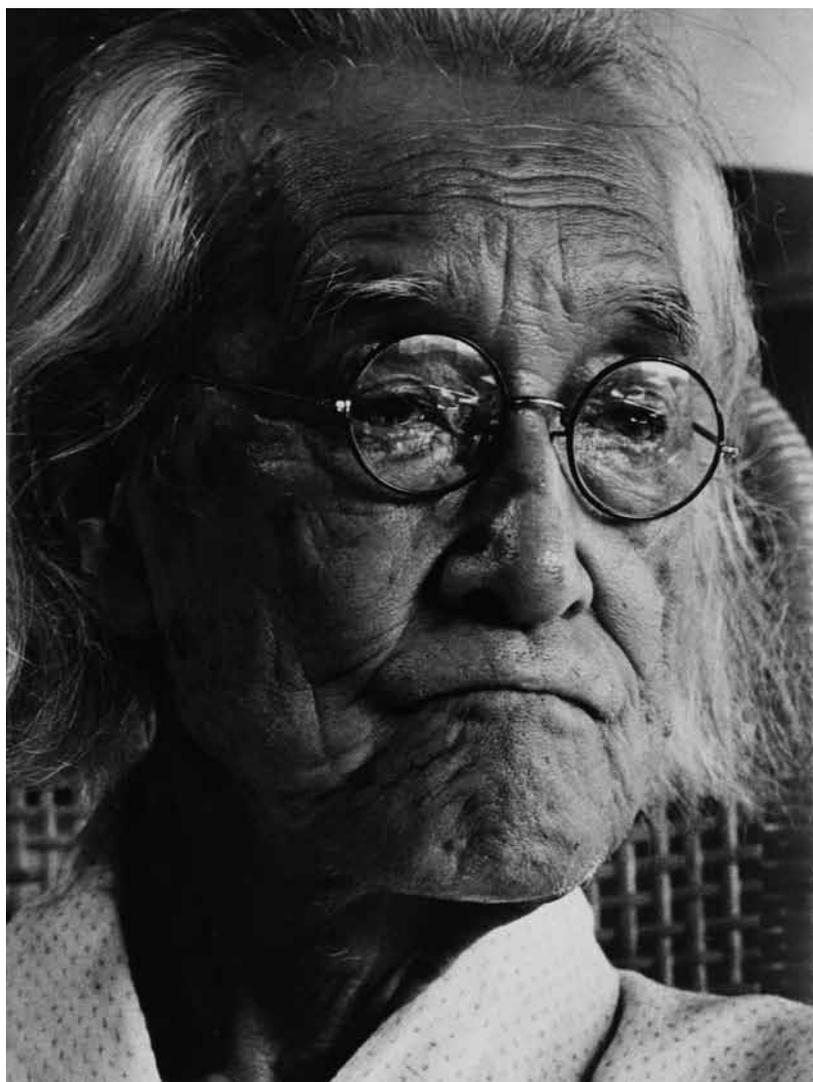


特集 長谷川如是閑と
その交遊



長谷川如是閑
【土門拳作品】
(中央大学図書館蔵)

CONTENTS

- 特集 長谷川如是閑とその交遊 (有島 武郎) 文学部教授 宇佐美 毅
(吉田 茂) 文学部教授 佐藤 元英
- 図書館さんぽ 番外「神田神保町古書街さんぽ」
- 新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録 (2009.9 ~ 2010.1 収集分)



柳田 国男(左)と共に

「駿河台のあたりをあるきつつ、長谷川如是閑のことをおもいだしている。
 いうまでもなく、大正時代を代表する評論人である。如是閑は、日本語を
 愛した。さらには、職人の心という日本文化の基本的なものを愛しつつも、
 日本そのものを客観化した上で愛をもつという態度を忘れなかった。
 九十四年を生き、その間、巨眼をもって時代を見つめつつ、細部の観察を
 怠らなかった。

学校は、中央大学の前身を出た。」

(司馬遼太郎『街道を行く 36 本所深川散歩・神田界隈』朝日文庫 1995)

長谷川如是閑(本名 萬次郎 1875-1969、以下、如是閑とする)(写真:表紙及び本ページ右上)という中央大学の
 生んだ偉大な先輩を紹介するにあたり、司馬遼太郎氏の簡潔かつ明解な文章によって、まずは如是閑のイメージを大づ
 かみにしていただけたらうか。もう少し詳しく彼の経歴を追ってみよう。

*

東京・深川の生まれ(父は材木商、後に 浅草「花やしき遊園地」を経営、祖父は大工の棟梁)、幼少の頃は本郷にあつ
 た坪内逍遙の英語塾、中村敬宇の同人社で学び、その後中央大学の前身東京法学院を卒業(1898年)、『日本』新聞社、
 『大阪朝日新聞』で活躍、『大阪朝日新聞』時代には論説委員として「天声人語」を執筆、社会部長としては全国中等学
 校野球大会(現:夏の甲子園大会)の発足に深く関与する(1915年)。朝日退社後は大山郁夫らと雑誌『我等』、『批判』
 を主宰し日本ファシズム批判を展開(1930年)、大正デモクラシーを代表する論客となる。戦後、貴族院議員、芸術院
 会員となり1948年には文化勲章を受章、1955年「中央大学創立70周年記念式典」において卒業生代表として祝辞
 を述べる。晩年15年間にわたって小田原市に居住するも、生涯にわたり在野の位置からペンを取り続け1969年死去、
 享年93歳。中央大学出身者としては現在のところ、ただ一人の文化勲章受章者である。

如是閑の没後、関係者から旧蔵書、書簡、自筆原稿等が数度にわたって中央大学図書館に寄贈され、「長谷川如是閑
 関係コレクション」を形成している。

*

旧蔵書は、一般和書4098冊、和装本2411冊、洋書669冊、総計7178冊という膨大なものであるが、何といっ
 ても眼を見張るのは2411冊の和装本である。内訳を見ると、狂歌、洒落本、滑稽本、黄表紙、読本、合巻、人情本等
 戯作類を主とする江戸文学全般と弓道書(和本)、漢籍類が中心である。

狂歌と戯作類は「笑月」の蔵書印のあるものが多く、如是閑の実兄で『東京朝日新聞』記者として活躍し、退社後は
 江戸文学の研究に没頭した山本笑月(本名松之助)の蔵書を如是閑が引き継いだものと推測される。また、100冊近い
 弓道書は健康のため、乗馬、登山と並んで弓に親しんだ如是閑が自ら蒐集したものであろう。編集部が行った大雑把な
 調査の範囲では、これほど多くの弓道書(和本)を所蔵している図書館は弓書の宝庫と言われる生弓斎文庫のほか、天
 理図書館、筑波大学(旧:東京教育大学)附属図書館、狩野文庫(東北大学)などごく少数でしかなく、法律学校を母
 体とした大学図書館としてはきわめて稀なコレクションと言えよう。

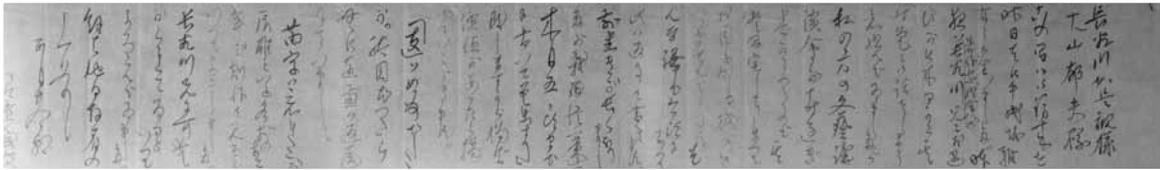
*

次に如是閑の手に届いた書簡類に移ろう。代表的な発信人の名を挙げると、有島武郎、大内兵衛、串田孫一、獅子
 文六、鈴木大拙、田中耕太郎、羽仁もと子、福田恆在、牧野富太郎、松方三郎、諸橋轍次、柳田国男、吉田茂等々である。
 おそらくは皆さんがご存じの人物もいるに違いない。日本近現代史にその名を留める人物の中でも、これ程幅広い交遊
 を持った人もそうはいないのではなかろうか。本号で紹介する有島武郎書簡、吉田茂書簡はそのごく一部に過ぎない。

*

(図書館では、本誌刊行に合わせて企画展示「長谷川如是閑:その交遊と旧蔵書」を開催し、中央大学が生んだ偉大な
 先輩の足跡、交遊、旧蔵書の一端をご覧いただく予定です。皆さんと如是閑翁との出会いを楽しみにしております。)

■有島武郎書簡一 大正九年（1920）一月二八日付（長谷川如是閑、大山郁夫宛）



（貴重書庫 K289/H36/A76）

【封筒表】

長谷川如是観様／市内神田区鎌／倉町／政教社内

【封筒裏】

瀧ノ下六・一〇／有島武郎／一月廿八日午前

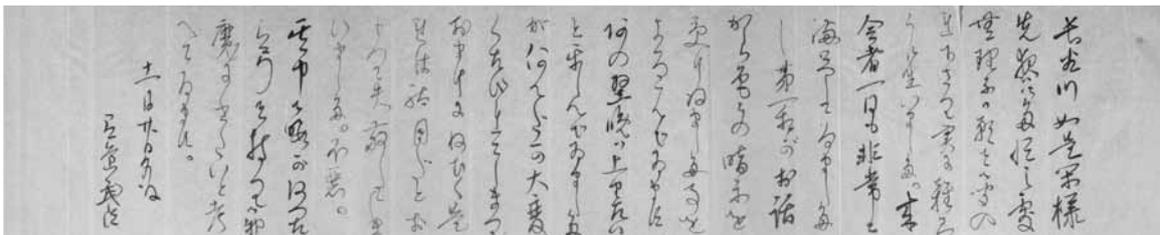
【本文】

長谷川如是観様
大山郁夫様

この間ハ御訪来を昨日はお手紙を難有う御坐いました。昨夜ハ著作家組合で長谷川兄ニお遇ひが出来るかと思時色々御話をしようと思組んでゐましたが私の方の文芸講演会が十時過ぎまでかゝつたので其俣帰宅してしまつてお目にかゝる機会を得ませんでした。そんな訳で今頃になつて此御返事を書きます。前置きが長くなりましたが「雑信一束」ハ本月五日頃までに書いて差出すコトニ致しますから掲げる価値があつたら掲げていただきます。「友」ハ如何でしたか。駄目だつたら無遠慮御返送下さいまし。苗字ハ忘れたが辰雄といふ名前の青年が創作を見ろといつてよこしました。長谷川兄に可愛がられてゐるといつてよろこんでゐました。詳は他日拝眉の上頓首

正月廿八日朝
有島武郎

■有島武郎書簡二 大正一〇年（1921）十一月二〇日付（長谷川萬次郎宛）



（貴重書庫 K289/H36/A76）

【封筒表】

市内東仲野／長谷川萬次郎様

【封筒裏】

麴町区下六番五一〇／有島武郎／十一月廿日

【本文】

長谷川如是閑様
先夜は御多忙の処無理なお願をお聞入れ下さつて実に難有う御座いました。来会者一同も非常ニ満足してゐましたし第一私がお話から色々の暗示を受け得ました事をよるこんでゐます。あの翌晩は上りたいと楽しんでゐましたが何んだか大変くたびれてしまつておまけにむくはれは駄目だともつて失敬してしまいました。不悪。其中御暇があつたら弓を持つてお邪魔に成たいと考へてゐます。

十一月廿日
有島武郎



有島武郎からの書簡について

文学部教授 宇佐美 毅

有島 武郎
【提供：有島記念館（北海道ニセコ町）】

長谷川如是閑は本学出身の著名なジャーナリストだが、ジャーナリズムがその時代の社会や思想と強い結びつきを持つ分だけ、後の時代になるとその重要性が忘れられてしまいがちである。学生諸君にとっては、如是閑よりも小説家・有島武郎（1878～1923年）（写真左上）の方がよく知られた存在かもしれない。

しかし、有島が活躍した時代に戻って考えてみるならば、少なくとも作品を発表する媒体がなければ文学作品自体が成り立たないのであり、如是閑のような存在が有島ら文学者の存在を支えていた。本誌で紹介されている二点の書簡（有島武郎から長谷川如是閑宛の書簡）からも、小説家からジャーナリストへの敬意と親しみとが伺えてたいへん興味深い。

*

最初の書簡（大正9年）は有島武郎から長谷川如是閑と大山郁夫に宛てたもの。長谷川如是閑と、もう一人の宛名人になっている大山郁夫の二人は、雑誌『我等』を刊行していた同人であった。『我等』には長谷川如是閑と大山郁夫が毎号文章を掲載している他、吉野作造・三宅雪嶺・河上肇らが評論を書き、吉田絃二郎らが創作を掲載していた。

書簡中にある『雑信一束』は、有島武郎が1919（大正8）年から1922（大正11）年にかけて、その『我等』に七回にわたって断続的に掲載した書簡体の文章である。毎回、「A兄」「M子へ」「B兄」「母へ」「H兄」「中川一政兄」といった呼びかけから始まって、自分の所感が語られる形式の文章であり、その最初の回には女優・松井須磨子の死が語られていることでも有名である。

有島武郎は、『惜みなく愛は奪ふ』や著作集二巻を発表した1917（大正6）年頃からかなりの人気作家となっていた。しかし、三歳年長で、ジャーナリストとして『我等』の同人を務めていた長谷川如是閑に対して十分な敬意をはらっており、その様子がこの書簡にもよくあらわれている。

*

もう一通の書簡は消印がつぶれているが、「〇」（ゼロ）の字が見えるので、大正10年の書簡と推測できる。長谷川如是閑と有島武郎とは、単に雑誌の同人と寄稿者という以上の結びつきがあったことが書簡からも伺える。如是閑の話から暗示を受けたというところに、有島が如是閑の思想へ敬意をはらっていることが伺えるし、その一方で、「くたびれてしまって」「ねむくて」といった正直な言い訳には如是閑との親密さも感じられる。

その後有島は、1923（大正12）年に既婚者の波多野秋子と心中死を遂げた。その際に、如是閑は『我等』に次のような文章を寄せている。「有島君は、ほかの如何なる人間であるよりも先づ詩人であった。有島君は自己を客観して、平凡な社会人としての苦悶と努力をしていると思っていたが、一種の詩人的最期を遂げ裏切られたようだ。（中略）有島君が恋愛をその自我肯定、すなわち、自己否定に於て完成せしめようとしたことは、君自身にとって、悲しむべき裏切りであった」（『傾向及批判——有島武郎の死』1923年8月）。

長谷川如是閑と有島武郎の関係は、単に雑誌の同人と寄稿者以上の結びつきがあったことが書簡からも伺え、それだけに如是閑は、有島の心中という死に方が認め難かったのであろう。

■吉田茂書簡 昭和三十年（1955）六月二九日付（長谷川如是閑宛）

【封筒表】

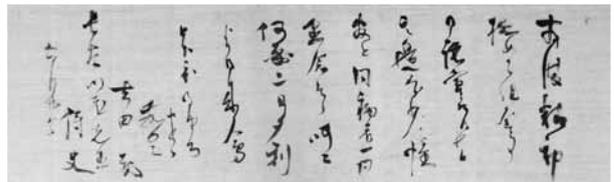
小田原市板橋八〇八
長谷川萬次郎様 惠展
（消印）神奈川大磯 30.6.29 前 8 - 12

【封筒裏】

大磯 吉田茂 六月廿八日

敬具 六月廿八日 侍史 長谷川老先生 吉田茂 ち申上候 来會被下度御ま 二日夕刻より御 して候呵々何卒 同病者一同懸念 から少々怪敷と 之如存申候其邊 健全との御託宣 拝復精神極めて

【本文】



（貴重書庫 K289/H36/Y86）



吉田 茂
【提供：毎日新聞社】

吉田茂からの書簡について

文学部教授 佐藤 元英

吉田茂（1878～1967 写真左上）と長谷川如是閑（1875～1969）、全く違った世界で活躍した二人を結びつけたのは、漢学と英学の教養を通しての共感性であったといっても過言ではない。彼らが初等中等教育を受けた明治10年代後半から20年代前半までの間は、憲法の制定、国会の開設、諸法典発布の準備の時代といわれ、その最中明治18年に英吉利法律学校（後身東京法学院、現中央大学）が創設されている。思想的には欧化主義やそれに対する反動として儒教主義的教養の復活の動きがみられる時代でもあった。彼らの物心がつくころ教養の源泉になっていたのは、漢学ないしその影響下にあった雰囲気であり、やや長じてからは外国の学問とくに英学であった。

*

如是閑は西洋の本と漢籍から受けた影響について、「不思議なのは、その西洋の本で与えられた考方と心のもち方や身のもち方と、四書五経の素読から始められた私の漢籍の教養が私に与えた心理、態度とは、さう喰い違つたものとは思へないことだ」と述べており、吉田も、「抽象的な議論は西洋に学ばなければならない。併し漢詩を含めて、我々の日常生活に関することか、人間と人間の交渉の上でのことならば、何でも漢籍に求められるといふ気がする。そして漢文に一時でも親んだことは、他の文学を読むのにも役立つと思つてゐる」と述べている。彼らは西洋の本を読んで教養を身につける以前に、漢籍を通して「気分」や「人間学」の一端に触れていた。それが彼らの後年の「捉われぬ人間」の性格を形成したといえる。

*

二人はイギリスの思考方式の強い影響下にあり、実利性、実学を好むという共通点で日本とアングロ・サクソンを把握、それぞれ独自の個性を発揮した。吉田は駐英大使時代から日米戦争回避に奔走し、外交官として軍部と激しく対立した。また、昭和7年に『日本ファシズム批判』を著した如是閑は、ジャーナリストとして戦時中に軍国主義、皇道主義を批判した。両者は共にドイツ的観念論を排し形式主義に嫌悪を示し、イギリスの実理性・現実性の自由な思考方式と伝統に共感性を抱いた。その歴史観と世界観に支えられて、1930年代から40年代にかけての国をあげての「親英派」排撃の中で主張を変えなかったのは、勇気のいることであり特異な存在であった。

*

終戦後、吉田茂は長谷川如是閑らと気兼ねのない会を催したが、名づけて「^{キチガイカイ}狂人会」といった。「狂人会」のメンバーは如是閑の他に、東畑精一、中谷宇吉郎、小汀利得、小倉正直、小林勇らであり、時々大磯の吉田邸「海千山千楼」に集まり酒宴が催された。小林勇（岩波書店取締役会長）は、「この人達が集ると、全く無礼講で、吉田を冷かしたり、笑ったりを平気でやった。当時最大の権力者である吉田をこのように扱う人間が余りいなかったであろう。多分それを吉田は面白がっていたのだと思う」（『一本の道』）と回想している。吉田は、「政治」という最も世俗的で権力欲にとりつかれた人間の実生活から、一時的に逃れようとして俗中に遊びの世界を築こうとした。それが「狂人会」の世界であった。

1954年12月第5次吉田内閣が総辞職し鳩山一郎内閣にかわり、吉田は7年2ヵ月に及ぶ政権担当を終え（昭和38年まで衆議員に留まる）、12月大磯の私邸に隠棲した。一方、如是閑は昭和30年3月小田原市板橋に転居し、「喜寿庵」の名も考えたが、数え年80歳に当るので「八旬荘」と名づけた。同年6月24日、吉田はその新居に次のように書簡を宛て、如是閑へ「狂人会」への招待をしている。「拜啓、来月二日土曜（第一）先年催候狂人会当邸にて催度、御繰合是非御来会被下度、狂人の顔振八前同様二有之、此段御案内迄如此候、頓首」（『吉田茂書簡』中央公論社1994）。本誌掲載の写真は、吉田が再度如是閑へ「狂人会」出席を願って送った書簡であるが、二人の間に皮肉とユーモアのセンスが見てとれる。

東京都千代田区神田神保町。世界最大の古書街、つまり古本の街として知られていますが、みなさんは歩いてみたことがありますか？「難しい本が多そう」「入りにくそう」と感じて足が向かなかった方が多いのではないのでしょうか。「新刊しか買わないから」という方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、図書館に新刊書店には無い本が多いように、神保町にも新刊書店や図書館には無い本がたくさんあります。そしてそこには難しい法律書・哲学書だけではなく、「見て楽しめる」本もたくさんあるのです。今回の「図書館さんぽ」は図書館を出て、見て歩いて楽しめる街、神保町を散歩します。



住 所：千代田区神田神保町 1-6 神保町サンビル 1階
 T E L：03-3259-1088
 F A X：03-5282-8663
 営業時間：11:00～19:00 休日：日祝
 U R L：http://www.ukiyoe.com/
 M a i l：toshusai@ukiyoe.com

お小遣いで手に入る本物。

「古典版画 東洲斎」で浮世絵に出会う。

複製ではない、本物の浮世絵がお小遣いで手に入ると言ったらみなさんは驚くでしょうか？「古典版画 東洲斎」では役者絵から風景画まで様々な浮世絵を扱っていますが、そのお値段には4千円から2千万円までと幅があります。浮世絵は絵師の知名度や保存状態などによって大きく価値が変わり、手ごろな値段のものは高校生が買いに来ることもあるのだとか。

壁一面に浮世絵が飾られて画廊のような雰囲気の内には英語表記が目につきます。「浮世絵はジャポニスムなどヨーロッパの芸術に影響を与えた美術として外国での評価が高いんですよ。」と店主の内藤さん。「神保町は日本最初のピアホールが残っていたりカレーの店がたくさんあったり、古きと新しきが一体となった街。来て見て歩いて楽しんでほしいですね。」とのことでした。

坂口安吾から京極夏彦まで。

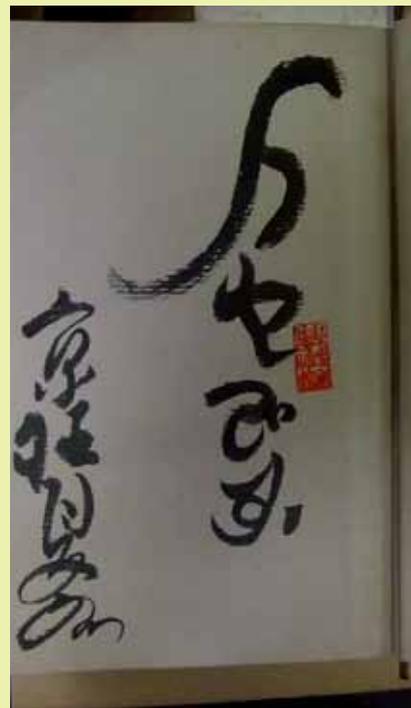
「けやき書店」であの作家の直筆に触れる。

うっかりすると通り過ぎてしまいそうなビルの6階にあるお店。入ると、パラフィン紙で丁寧にくるまれた本の背に「署名本」と紙が貼ってあるのが目につきます。ここ「けやき書店」は、坂口安吾や太宰治など「無頼派」といわれる作家を中心とした、近現代日本文学の署名本、初版本を多く扱っているお店です。

「好きな作家の署名本を手に入れるのは嬉しいものではないでしょうか？その作家の肉体的な部分に触れられる気がするのも、署名本の魅力ですね。」とは店主の佐古田さんの弁。無頼派のものだけではなく、今をときめく伊坂幸太郎や京極夏彦の署名本も見せていただきました。お値段は数千円から、村上春樹のように現代作家でも数万円するものも。

小説の好きな方は一度訪れてみてはいかがでしょうか。お気に入りの作家の署名本が意外な値段で手に入るかもしれません。

住 所：千代田区神田神保町 1-9 ハヤオビル 6階
 T E L：03-3291-1479
 F A X：03-3291-1430
 営業時間：11:00～19:00 休日：日祝
 U R L：http://keyaki.jinbou.net/
 M a i l：keyaki@k8.dion.ne.jp





住 所：千代田区神田神保町 2-3 岩波書店アネックス 2 階
 T E L：03-3264-2780
 F A X：03-3264-1020
 営業時間：10:00～18:30 (祝11:00～17:30) 休日：日
 U R L：http://shinsendo.jimbou.net/
 M a i l：shinsendo@forest.ocn.ne.jp

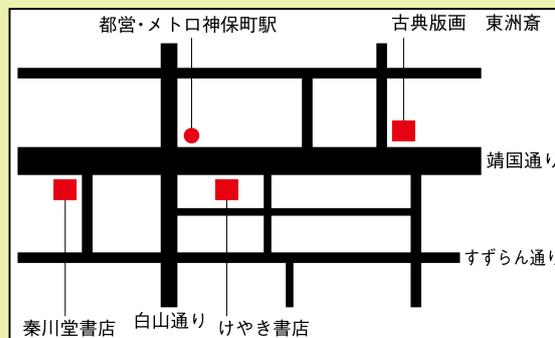
<最後に>

いかがでしたか。今回ご紹介したのは軒を連ねる約 110 軒の古書店のごく一部です。みなさんもぜひ一度足を運んで、神保町の空気にふれてみてください。

うちの家のある場所、元々なんだったの？ 「秦川堂書店」で古地図を探る。

入り口近くに並べられた古今東西の地図が目を引く「秦川堂書店」。特に充実しているのは東京を中心とする日本の古い地図です。「江戸・東京の郷土資料を収集していたんだけど、その背景として地図も集めるようになったんですよ。」と店主の永森さん。今は自分の住んでいるところの昔の姿に興味を持って調べに来るなど、地図目あてのお客さんも多いそうです。

秦川堂は永森さんで四代目になる老舗です。「昔は近くの大学の先生が新入生を連れて、神保町のどこにどんな書店があるかレクチャーして回ることもあったんだけど。」と少し寂しそう。「古書店には図書館に無い本もたくさんある。学生さんには古書店の親父さんに気軽に声を掛けてみてほしいですね。文献目録などであたりを付けてから来てくれるとアドバイスもしやすいかな。」とメッセージを頂きました。



新収資料紹介

①教職員著作目録 2009.9 - 2010.1 配架図書一覧 ()は所属学部等

著者名	書名	出版社	配置場所	請求記号
阿部 泰隆 (総合政策学部)	著 実効的な行政経済の法システム創造の法理論 (行政法解釈学 2)	有斐閣	開架・中央	323.9/A12
池田 和臣 (文学部)	編 飯島本源氏物語 = Iijima-bon Genji Monogatari 9・10	笠間書院	中央・国文	913.36/Mu56
石川 晃弘 (名誉教授)	著 体制転換の社会学的研究：中欧の企業と労働	有斐閣	開架・中央	366.5/I76
東京電力技術開発研究所ヒューマンファクターグループ 野中 郁次郎 磯村 和人 (国際会計研究科) ほか	編 組織は人なり	ナカニシヤ出版	開架・中央	336.3/To46
大淵 博義 (商学部)	著 国税の常識 第12版 (知っておきたい)	税務経理協会	開架・中央	345/O19
ツヴェタン・トドロフ 小野 潮 (文学部)	著 文学が脅かされている (叢書・ウニベルシタス 929)	法政大学出版局	開架	904/To18
笠井 修 (法務研究科)	著 建設請負契約のリスクと帰責	日本評論社	開架	510.95/Ka72
澤田 壽夫 柏木 昇 (法務研究科)	編 著 マテリアルズ国際取引法 International business law : notes, cases & materials 第2版	有斐閣	開架・中央	329.84/Sa93
金光 仁三郎 (経済学部)	著 大地の神話：ユーラシアの伝承	中央大学出版部	開架・中央	162/Ka53
木田 元 (名誉教授)	著 ピアノを弾くニーチェ	新書館	開架	914.6/Ki12
今野 浩 (理工学部)	著 「金融工学」は何をしてきたのか (日経プレミアシリーズ 060)	日本経済新聞出版社	開架・中央	338.01/Ko75
佐々木 信夫 (経済学部)	著 地方議員 (PHP新書 631)	PHP研究所	開架・中央	318.4/Sa75
細谷 千博 佐藤 元英 (文学部)	編集 日米交渉関係調査書集成 復刻 全2巻	現代史料出版	中央・総政	M319.1053/H95
佐藤 元英 (文学部)	著 昭和初期対中国政策の研究：田中内閣の対滿蒙政策 増補改訂新版	原書房	開架・中央	319.1022/Sa85

著者名	書名	出版社	配置場所	請求記号
ルードルフ・フォン・イエーリング 眞田 芳憲 (名誉教授) 矢澤 久純	法学における冗談と真面目：法学書を読む人へのクリスマスプレゼント：笑いながら真実を語る (日本比較法研究所翻訳叢書 57)	中央大学出版部	開架・中央	321/J45
清水 元 (法務研究科)	担保物権法 補訂版 (プログレッシブ民法)	成文堂	開架	324.3/Sh49
杉山 高一 (理工学部) 藤越 康祝	統計データ解析入門	みみずく舎 医学評論社 (発売)	開架・中央	417.5/Su49
諏訪部 仁 (法学部)	ジョンソンとボズウェル：事実の周辺 (中央大学学術図書 73)	中央大学出版部	中央	930.2/J64/Su87
江藤 秀一, 芝垣 茂 諏訪部 仁 (法学部)	英国文化の巨人：サムエル・ジョンソン	港の人	開架	930.2/J64/E78
高田 太久吉 (商学部)	金融恐慌を読み解く：過剰な貨幣資本はどこから生まれるのか	新日本出版社	開架・中央	338.9/Ta28
棚瀬 孝雄 (法務研究科) ほか	権利実効化のための法政策と司法改革 (小島武司先生古稀祝賀 続)	商事法務	開架・中央	327/Ta85
関 礼子 中澤 秀雄 (法学部)	環境の社会学 (有斐閣アルマ Specialized)	有斐閣	開架	361.48/Se24
長野 ひろ子 (経済学部) 松本 悠子 (文学部)	経済と消費社会 (ジェンダー史叢書 6)	明石書店	開架・中央	367.2/N16
中村 達也 (商学部)	さまよう経済と社会：「時代の叫び」162冊	中央大学出版部	開架・市ヶ谷	019/N37
トマス・ネーグル 中村 昇 (文学部) ほか	どこでもないところからの眺め	春秋社	開架・中央	104/N26
中村 昇 (文学部)	ワイトゲンシュタイン：ネクタイをしない哲学者 (哲学の現代を読む 9)	白水社	開架	134.8/W79/N37
野村 修也 (法務研究科)	年金被害者を救え：消えた年金記録の解決策	岩波書店	開架・中央	364.6/N95
旧陸軍登戸研究所の保存を求め る川崎市民の会 坂田 光義 (名誉教授)	フィールドワーク陸軍登戸研究所：学び・調べ・考えよう	平和文化	中央	395/Ky8
坂田 光義 (名誉教授)	林彪春秋	中央大学出版部	開架・中央	312.22/H59
深町 英夫 (経済学部)	中国政治体制 100年：何が求められてきたのか	中央大学出版部	開架	312.22/F72
星野 智 (法学部)	国民国家と帝国の間	世界書院	開架・中央	319/H92
星野 智 (法学部)	市民社会の系譜学	晃洋書房	開架・中央	362.06/H92
トム・マッカーサー 牧野 武彦 (経済学部)	英語系諸言語	三省堂	開架・中央	830.2/Ma13
升田 純 (法務研究科)	要約マンシヨ判例 155	学陽書房	開架・中央	365.31/Ma66
升田 純 (法務研究科)	風評損害・経済的損害の法理と実務	民法研究会	開架・中央	324.55/Ma66
升田 純 (法務研究科) 関根 眞一	モンスタークレイマー対策の実務と法：法律と接客のプロによる徹底対談 第2版	民法研究会	開架・中央	673.3/Ma66
升田 純 (法務研究科)	現代社会におけるプライバシーの判例と法理：個人情報保護型のプライバシーの登場と展開	青林書院	開架・中央	316.1/Ma66
丸山 秀平 (法務研究科)	新株式会社法概論	中央経済社	開架・中央	325.24/Ma59
丸山 秀平 (法務研究科)	やさしい会社法 第10版	法書学院	開架・中央	325.2/Ma59
相原 修, 嶋 正 三浦 俊彦 (商学部)	グローバル・マーケティング入門：「70億人世界市場」をとらえる新視点	日本経済新聞出版社	開架・中央	675.2/A24
目加田 説子 (総合政策学部)	行動する市民が世界を変えた：クラスター爆弾禁止運動とグローバルNGOパワー	毎日新聞社	開架・中央	319.8/Me29
森茂 岳雄 (文学部) 中牧 弘允, 多田 孝志	学校と博物館でつくる国際理解教育：新しい学びをデザインする	明石書店	開架・中央	069.6/N35
森田 洋司 矢島 正見 (文学部)	新たなる排除にどう立ち向かうか：ソーシャル・インクルージョンの可能性と課題 (シリーズ社会問題研究の最前線 2)	学文社	開架・中央	361.4/Mo66
矢内 一好 (商学部) 高山 政信	スピードマスター国際税務 第4版	中央経済社	開架・中央	336.98/Y54
山口 真美 (文学部)	センスのいい脳 (新潮新書 326)	新潮社	開架 中央	新潮新書/326 141.2/Y24
山田 昌弘 (文学部)	なぜ若者は保守化するのか：反転する現実と願望	東洋経済新報社	開架	360/Y19

②中央大学関係資料目録 2009.9 - 2010.1 (貴重書・準貴重書指定)

著者	書名	請求記号
長谷川 如是閑 執筆あり	我等：政治・社会・教育・文藝の批判 創刊号	Z05/W16



貴重書・準貴重書の利用について

貴重書、準貴重書の閲覧は事前に手続が必要です。
大学院生は指導教員の推薦状が、学部学生は指導教員の同伴が必要となります。
詳しくは中央図書館 2階カウンターに、お問い合わせ下さい。